

COC奨励研究

「『筑豊の子供を守る会』関係資料集成の刊行に
向けて」(2年目)の報告

研究代表 細井 勇 (福岡県立大学特任教授)

2023年3月7日

研究会のメンバー

メンバー 細井 勇 (福岡県立大学人間社会学部特任教授)
堤 圭史郎 (福岡県立大学人間社会学部教授)

本報告の展開

1. 本共同研究の目的と期待される成果
2. 2022年度（2年目）の活動報告
 - － 「筑豊の子供を守る会」関係資料集成、全8巻の刊行
3. 「筑豊の子供を守る会」とは
4. 「福吉炭住での活動」とは
5. 2023年1月、出版記念シンポジウム（於国際基督教大学）の開催
6. 2023年2月、公開講座Ⅱ：シンポジウム「筑豊の炭鉱閉山期、『筑豊の子供を守る会』の活動を振り返る」の開催
7. 同日の座談会の開催
8. まとめにかえて

1. 本共同研究の目的と期待される成果

- (1) 本共同研究の目的
- (2) 本資料集成が関係者に知られ、読まれることによる成果
- (3) 筑豊の歴史を知らない若い世代に向けての記憶遺産となるという成果
- (4) 学術的貢献が期待できるという成果

2. 2022年度（2年目）の活動報告（前半）

（1）2021年度（1年目）の活動報告

「筑豊の子供を守る会」関係資料集成に収録する資料の補充、目録化、選定。

資料提供者と1年目の学内研究員をもって編集委員会（代表細井勇）として、編集委員会編として刊行することを決定。「解説」は細井勇と鬼塚香（人間社会学部准教授）が執筆。

（2）2022年度（2年目）の活動報告

2022年6月15日 「筑豊の子供を守る会」関係資料集成編集委員会編『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』第1巻～第4巻、刊行。

2022年11月15日 「筑豊の子供を守る会」関係資料集成編集委員会編『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』第5巻～第8巻、刊行。

2. 2023年度（2年目）の活動経過報告（後半）

2023年1月9日 国際基督教大学平和研究所を主催として、「筑豊の子供を守る会」関係資料集成出版記念シンポジウム：1960年～70年の若者は、何を考え、行動したのか ー歴史を自分たちの手で創造するー、を開催（於国際基督教大学アラムナイハウス）。参加者37名。

2023年2月11日 福岡県立大学公開講座Ⅱ：シンポジウム「筑豊の炭鉱閉山期、『筑豊の子供を守る会』の活動を振り返る」を開催。その後、座談会として情報交換会を設ける。シンポジウムの参加者75名、座談会参加者38名。

『「筑豊の子供を守る会」関係資料集成』第1巻～第8巻

- 第1巻 筑豊の子供を守る会Ⅰ
- 第2巻 筑豊の子供を守る会Ⅱ
- 第3巻 筑豊の子供を守る会Ⅲ
- 第4巻 筑豊の子供を守る会Ⅳ
- 第5巻 福吉炭住での活動
- 第6巻 鞍手地区での活動／筑豊協力伝道奉仕会
- 第7巻 炭鉱犠牲者復権の塔
- 第8巻 県福祉事務所

3. 「筑豊の子供を守る会」とは

- 筑豊の中小炭鉱の閉山は1959年に集中、そこでおこった救援活動としての黒い羽根運動の延長にあるが、それを乗り越えようとしたキリスト教学生運動であった。
- 1960年の夏のキャラバン活動は、日本キリスト教奉仕団によるミルク給食への協力であり、東京神学大学、国際基督教大学、立教大学、明治学院大学のチーム、全体で56人が参加した。
- これを契機に1961年2月、「筑豊の子供を守る会」を起こすことを決定した。
- 1961年夏（2年目）からは各大学チームが一定の炭住で2週間継続して子ども会活動を中心に取り組んだ。また新たに同志社大学や関西学院大学のチームが加わった。

「筑豊の子供を守る会」の委員長

1961年度（初代委員長） 船戸良隆（東京神学大学）

1962年度（2代目委員長） 李海竜（明治学院大学）

1963年度（3代目委員長） 山本将信（東京神学大学）

1964年度（4代目委員長） 黒沼宏一（青山学院大学）

1965年度（5代目委員長） 内田光一（東京神学大学）

1966年度（6代目委員長） 櫻井秀教（東京神学大学）

1967年3月、中央組織の解散

4. 「福吉炭住での活動」とは

- 1962年4月 船戸良隆は夏休み、冬休みを活用したキャラバン活動の限界を感じ、福吉炭住での1年間滞在を決意。子ども会、青年会を起こし、集会所を建設した。
- 1963年4月 犬養光博、松崎一は船戸に代わって1年間滞在。「週刊福吉」を創刊した。
- 1964年4月 山本将信、後半から山下信治が引き継いで滞在。
- 1965年4月 犬養光博は福吉炭住に戻り、福吉伝道所を開設。「月刊福吉」を新たに創刊。

5. 2023年1月9日開催、国際基督教大学平和研究所主催 「筑豊の子供を守る会」関係資料集成出版記念シンポジウム

テーマ：1960年～70年の若者は、何を考え、行動したのか —歴史を自分たちの手で創造する—（於国際基督教大学アラムナイハウス）

総合司会 木部尚志（国際基督教大学、平和研究所所長）。

発題者① 細井勇（福岡県立大学教授） 「筑豊炭鉱の閉山炭住と守る会運動」

発題者② 船戸良隆（守る会初代委員長） 「運動初期の思想的背景」

発題者③ 櫻井秀教（守る会第6代【最終】委員長） 「守る会解体とその後の個人的変遷」

コメンテーター①松井亮輔（初代副委員長、国際基督教大学チームリーダー）

コメンテーター②木下（李）海竜（第2代委員長、明治学院大学チームリーダー）

コメンテーター③黒沼宏一（第4代委員長、青山学院大学チームリーダー）

コメンテーター④山田（村田）純子（東京女子大学チームリーダー）

6. 2023年2月11日（土）、福岡県立大学公開講座Ⅱ

シンポジウム「筑豊の炭鉱閉山期、『筑豊の子供を守る会』の活動を振り返る」（於福岡県立大学大講義室）の開催

シンポジウム 司会進行 細井勇（福岡県立大学特任教授）

シンポジスト

犬養光博（2年目の「守る会」の活動から参加、その後福吉伝道所を開設）

黒沼宏一（第4代「守る会」委員長）

櫻井秀教（第6代「守る会」委員長）

鬼塚香（福岡県立大学准教授）

守る会の活動に参加して 数人からのコメント

7. 公開講座Ⅱの後の座談会開催（於附属研究所大セミナー室）

当時同志社大学チームの一員として参加し、黒沼宏一と中央委員会を担った山本信夫の談から考えること。

「行政関係者に「守る会」のことを知っているか」と聞くと、皆知らないという。

地域住民も知らない人がほとんどである。それはなぜか。

8. まとめにかえて

「守る会」の活動は歴史上、どのように位置づけ可能か
第1に考えれること

キリスト教学生運動史という文脈で捉える。具体的には昭和初期の基督者学生運動（SCM）との関係を考えるという方法。

→あまりに時代背景、社会背景が異なる。

第2に考えれること

子ども会活動の歴史という文脈で考える。あるいは学生セツルメント運動史の文脈で考えるという方法

→しかし、「守る会」はこうした文脈に位置づかない。筑豊の炭鉱閉山という1回生の文脈における個性的な活動であった。